時間認知モデル

― 認知言語学的観点からの考察 ―

碓井 智子

京都大学

hitsuji77-lj@infoseek.jp

1. はじめに

私達人間は時間というものを如何に認知し言語化しているのだろうか。人は時間のような抽象概念を認知する際、より具体的で認知が容易な空間の概念を用いて概念化し、そして言語化していると言われている。しかし言語に関していえばすべての時間表現が空間表現を併せ持っているわけではない。例えば英語の"previous"や日本語の「のち」などは時間表現としてのみ使用される事例である[1]。このように空間の用法を持たない時間表現は多く存在する。空間的な意味を持たないこれらの語が空間からの写像でないとすると一体どこから拡張したのだろうか。すべての時間表現が空間からの写像ではないようである。そしてもう一つ、空間認知と時間認知において非常に興味深い事実として、その「普遍性」と「特定文化性」が挙げられる。文化が違えども人は同じ構造の人体を持ち、皆直立二足歩行を行う。言語とは身体経験に根ざしたものであるという認知言語学の観点に立てば、空間認知と時間認知にはある種の普遍性が存在している可能性は否めない。又同様にある特定の文化に根ざした時間認知方法も多く見られるはずである。普遍的な時間認知と、特定文化に根ざした時間認知、これらを統一的な視点から分析した時間認知モデルの構築が本稿の狙いである。そしてこれまでの先行研究において重視されることのなかった「順序」という新たな概念を、本稿では時間認知の際に不可欠な重要概念と位置づけ、「順序」を取り入れた新たな時間認知モデルを提示する。

2. 時間認知とは

時間認知に関してはこれまで多くの分野において議論がなされてきた。しかし明確な答えが未だないというのが現状である。本節では分析哲学において長年議論されてきた時間論に関する論争を概観し、それを踏まえて認知言語学の観点から時間論を再考する。

2.1. 分析哲学における時間認知

J.M.E. McTaggart (1866-1925)と B.A.W. Russell(1872-1970)は共に 20 世紀を代表する

[1] その他にも"while" "during"や"since"等、時間表現としてのみ使用される事例は多く見られる。

© 碓井 智子、「時間認知モデル」

『言語科学論集』、第 8 号 (2002)、pp. 1-26

哲学者である。彼等は多くの様々な哲学的な問題を明らかにしてきたが、本稿で問題とするのは彼らが長年論争し続け、そしていまなお明確な結論が出ていない時間認知に関する議論である。

マクダガートは「時間の非実在性」を唱えた 20 世紀の分析哲学者である。彼は分析哲学の観点から「時間の非実在性」を論証したが、ここで問題としたいのは、彼の「時間の非実在性」に関する議論ではなく、彼の「時間の捉え方」である。マクダガートは「時間にはA系列(過去・現在・未来)[2]と B 系列(より前・より後)による記述がある」事を指摘している。つまり時間認知において二種類の方法があることを彼は認めているのである。そしてまたラッセルも同様に、時間にはA系列とB系列の二種類の認知方法があることを認め、これら二種類の時間認知に関する詳細な記述を行っている。マクダガートとラッセル、彼らの意見の相違は、互いに時間認識において二種類の方法がある事は認めるが、そのどちらがより本質的なものかという位置づけにあった。マクダガートは「A系列はB系列よりも本質的である」と考え、一方ラッセルは「B系列をより本質的である」と考えた。なぜマクダガートは A 系列を本質的であると考えたのか。彼の主張はこうである。「私たちは時間の中の出来事を今である現在にあると知覚し、そしてその現在のみが私たちが現実に知覚することが可能な出来事である。さらに私たちは記憶や演繹を根拠に実在するすべての出来事を過去か現在か、もしくは未来とみなす。また私たちによって観察される時間の出来事は絶えず A 系列を成している。以上のことから B 系列よりも A 系列の方がより本質的なのだ」とマクダガートは論証している。また彼はアリストテレスからの時間論の流れを受けている為、「時間は変化なしにはありえない」という前提から議論を始めている。その為「A系列には動的な変化が見られるがB系列にはそのような変化は見られない」とし、A系列が B 系列より本質的であると結論付ける。一方ラッセルは、「過去・現在・未来というものは時間それ自体に属する属性ではなく、あくまでも認識主体にかかわってのみ理解可能なものであり、時制(A系列)の存在は認知主体の意識の存在に依存するものである。従って意識がなければ時制は存在せず、存在するのは出来事の系列(B系列)のみとなる」 以上の理由からラッセルはB系列はA系列よりも本質的であると結論付けている。

分析哲学においてはA論者(マクダガート)とB論者(ラッセル)の論争は発展しながらも今現在まで続いている、A 論者は「過去・現在・未来」こそが時間にとって本質的であると主張し、B 論者は「より前・より後」こそが本質的なのであると反論する。時間を如何に認識しているのかという認識レベルを問題とした彼らの議論においてはA系列とB系列どちらがより本質的であるかという問題に対しての答えを見出すのは非常に困難であるが、言語を分析対象とする言語学において、言語事例という媒体を通してA系列とB系列どちらがより本質的なのかという問題に答えを見出すことは可能なのではないだろうか。この問題を明らかにすることは本稿の主たる目的ではないが、ここで注目すべきは時間認知にはA系列(より前・より後)とB系列(過去・現在・未来)の二種類の方法があるという点である。

[2] A系列は「過去・現在・未来」といった時制述語による出来事の記述であり、B系列は「より前・より後」といった線形の出来事順序構造のことである。

次節では認知言語学の観点からメタファーを用いて時間認知表現を分析した Lakoff and Johnson(1999)を紹介する。

3. 認知言語学における時間認知

認知言語学の観点から時間認知を詳細に論じたものに Lakoff and Johnson(1980)と Lakoff and Johnson(1999)がある。彼らは、時間というものは「動き」や「空間」もしくは「イベント」と関係なしには認知できないものであり、時間はそれ自体では概念化不可能なものであると考えた。そして私たちにとって時間の概念化を可能としているのが空間を基にしたメタファーであるとし、メタファーを用いた時間論を展開している。そして *TIME IS MOTION*という前提に立ち分析している点も彼等の研究の主たる特徴として挙げられる。本節では Lakoff and Johnson(1999)における時間のメタファー論を概観し、彼らの理論に見られる問題点を指摘する。

3.1. Time Orientation Metaphor

Lakoff and Johnson(1999)では『英語における時間のメタファーには構造があり、その最も基本的なメタファーは「観察者が未来を前方にして現在に位置し、過去が観察者の後方にあるメタファー」(Lakoff and Johnson 1999:140)である。そしてこれを *TIME ORIENTATION METAPHOR* と呼ぶ』と定義している。彼らが *TIME ORIENTATION METAPHOR* と呼ぶメタファーの構図が(1)にあたる。

(1) *THE TIME ORIENTATION METAPHOR*

The Location of the Observer ⟶ The Present
The Space in Front of the Observer ⟶ The Future
The Space Behind the Observer ⟶ The Past

観察者である人間は現在に位置し、その観察者の前方が「未来」、後方が「過去」となる方向付けを行うのが(1)の *TIME ORIENTATION METAPHOR* である。この時間の方向付けは世界の言語にも見られるものであるとし[3]、時間の特性として「方向性」とは不可欠なものであると考えている。このメタファーの言語事例が次の(2)である。

(2) a. That's all *behind* us now.
b. Let's put that in *back* of us.
c. We're looking *ahead* to the future.
d. He has a great future *in front of* him. (Lakoff and Johnson 1999:140)

(2a)の場合、観察者は現在に位置しており、観察者の後方を表す語"behind"は時間的には

[3] 彼らは *TIME ORIENTATION METAPHOR* はすべての言語が共通して持つが(1)に示したような方向性の位置づけが異なる言語の存在についても言及している。(Lakoff and Johnson 1999:140-141)

過去を表している。また(2c)の場合は、観察者の前方を表す"ahead"が時間的には未来を表している。このように観察者を現在におき、その前方を未来、後方を過去と位置づける時間の方向付けが *TIME ORIENTATION METAPHOR* である。このメタファーは空間のドメインを基にした時間への写像メタファーである。しかし *TIME ORIENTATION METAPHOR* は「方向性」を指定するだけで、「時間の動き」に関しては何も言っていない。空間のドメインを基にしたこの *TIME ORIENTATION METAPHOR* と、次節で紹介する時間の動く特性を持つメタファー、*MOVING TIME METAPHOR* と *THE MOVING OBSERVER METAPHOR*、これらのメタファーを組み合わせることにより、空間のドメインから写像された、動く時間の言語分析をレイコフ等は詳細に行っている。次節では「時間の動き」を反映したメタファー、*THE MOVING TIME METAPHOR* と *THE MOVING OBSERVER METAPHOR* を考察する。

3.1.1. Moving Time Metaphor

「動かない認知主体が固定された方向を向いている。そして彼の前方から後方へと物体つまり時間が過ぎ去っていく。動いている物体としての時間はその動きに方向性を持ち、認知主体に前面を向けてこちらへと向かってくる」(Lakoff and Johnson1999:141)これがレイコフ達が *THE MOVING TIME METAPHOR* と呼ぶものである。そして空間からのメタファーによる写像関係を彼らは以下のように表している。

(3) *THE MOVING TIME METAPHOR*

Objects ⟶ Times

The Motion of Objects Past the Observer ⟶ The "Passage" of Time

(Lakoff and Johnson 1999:141)

このメタファーにおいて、動いている物体は時間であり、観察者を通り越してゆく物体の動きは時間の流れとなっている。さらに(3)のメタファーを前節で考察した *TIME ORIENTATION METAPHOR* に当てはめると次の(4)のようになる。

(4) The Location of the Observer ⟶ The Present

The Space in Front of the Observer ⟶ The Future

The Space Behind the Observer ⟶ The Past

Objects ⟶ Times

The Motion of Objects Past the Observer ⟶ The "Passage" of Time

(Lakoff and Johnson 1999:142)

観察者の位置する時点は現在であり、観察者の前方は未来、後方は過去となる。時間は動

く物体であり、観察者を通り過ぎてゆく物体の動きは時間の流れとなる。時間はその前面を観察者に向けて通り過ぎてゆくというのが観察者と時間の関係である。そして(4)の時間認知の構図から(5)に見られるような言語事例が生まれるとしている。

(5) a. Time is *flying by.*
b. The time for action *has arrived.*
c. Let's meet the future *head-on.*
d. In the weeks *following* next Tuesday, there will be very little to do.
e. On the *preceding* day, I took a long walk.　(Lakoff and Johnson 1999:143)
f. Next week and the week *following* it.　(Lakoff and Johnson 1980:43)

(5a)や(5b)は時間が移動している典型的な事例である。(5c)の場合、動く時間はその前面を観察者に向けて向かって来るので、現在に位置する観察者からすると物体である時間はその前面をこちらに向けて向かってくることになる。そのため"head-on"などの事例が生まれるとしている。また時間は比喩的に前と後を持っている為、動く時間の後ろに続く時間、またその前に位置づけられる時間が存在するとして(5d)や(5e)などの"following"や"preceding"の事例も *THE MOVING TIME METAPHOR* の一例であるとされている。ここで問題なのは、レイコフ達が「時間は動く物体である」という点と、「時間は方向性を持っている」というこの二点を重視し過ぎた点である。(5)はすべて *MOVING TIME METAPHOR* に属すると考えられている言語事例であるが、(5a)〜(5f)に行くに従って時間が実際に動いているという認識はなくなっていく。(5e)や(5f)になると観察者が現在に位置しており時間が流れている(4)に示したような構図は殆ど想起されない。(5a)の場合、確かに時間は流れているが、その他の事例とは異なり、認知主体は動く時間に対して「方向付け」を行っておらず、単に流れている時間を認知しているに過ぎない。そして(5c)の場合は動詞"meet"が使用されていることもあり、時間が動いているというよりは"meet"の主語である"we"がこれから移動をともない時間に向かって行くという印象を受ける。さらに(5f)の事例においてレイコフ達は、"following"の部分のみを問題視しているが、"next week"の"next"という時間表現は分析対象としていない。"next"も時間表現として非常に使用頻度の高い頻出語である。"next"に関しては、そこに時間の流れのような動的な時間は全く感じられず、どちらかというと静的な時間の順序付けがなされている。"next"は方向性の面ではニュートラルな状態であり、且つ静的であるといえる。つまりレイコフ達が重視した「方向性」も「動き」も持たない語ということになる。このような「動き」や「方向性」を持たない言語事例を「動き」や「方向性」を前提とした *MOVING TIME METAPHOR* としてひとまとめにしてしまうのは事実に反しているのではないか。また彼らの理論に従うと次のような事例も同様に *MOVING TIME METAPHOR* の一例となる。

(6) I'd only seen him the *previous* day.

例えば(6)の"previous"という語は時間表現において順序関係を表す際にしか使用されず、空間表現を持たないのである。つまり"previous"に関しては、(4)に示したように空間からの写像であるということはいえない。ではこのような事例はどこから生まれてきたのかという問題が残る。本稿では4節において Lakoff and Johnson(1999)に見られるいくつかの問題点を明らかにし、又彼らとは異なる視点から新たな時間認知モデルを構築する。

3.1.2. Moving Observer Metaphor

Lakoff and Johnson(1999)において、時間の動きに関する二つの主要なメタファーとして *MOVING TIME METAPHOR* と、*MOVING OBSERVER METAPHOR* が挙げられている。本節では後者、*MOVING OBSERVER METAPHOR* について考察する。*MOVING TIME METAPHOR* が時間は動いていると認知されるのに対し、*MOVING OBSERVER METAPHOR* は認知主体自身が固定された時間の中を移動していると認知される。またこの場合動いている認知主体は時間をあたかも景色のように認知することから、*TIME'S LANDSCAPE METAPHOR* と呼ばれることもある。その *MOVING OBSERVER METAPHOR* は(7)のような構図を持つと考えられている。

(7) *THE MOVING OBSERVER METAPHOR*

Locations on Observer's Path of Motion ⟶ Times
The Motion of the Observer ⟶ The "Passage" of Time
The Distance Moved By the Observer ⟶ The Amount of Time "Passed"

(Lakoff and Johnson 1999:146)

観察者が移動する場所は時間であり、観察者の動きは時間の流れとなる。そして観察者が移動してきた距離は流れ去った時間の量となる。さらにこの *MOVING OBSERVER METAPHOR* を *TIME ORIENTATION METAPHOR* にあてはめると次のようになる。

(8) The Location of the Observer ⟶ The Present
The Space in Front of the Observer ⟶ The Future
The Space behind the Observer ⟶ The Past
Locations on Observer's Path of Motion ⟶ Times
The Motion of the Observer ⟶ The "Passage" of Time
The Distance Moved by the Observer ⟶ The amount of Time "Passed"

(Lakoff and Johnson 1999:146)

観察者が位置しているのは現在であり、観察者の前方は未来、後方は過去となる。そして

観察者の移動する場所は時間であり、観察者の動きは時間の流れと認識され、観察者の移動してきた距離は流れ去った時間の量となる。(8)の写像関係から(9)のような言語事例が生まれる。

(9) a. As we *go through* the years, ...
　　b. We're *approaching* the end of the year.　(Lakoff and Johnson 1980:43-44)

Lakoff and Johnson(1980)においては、*MOVING OBSERVER METAPHOR* の典型事例として(9)をあげている。(9a)では観察者である"we"が時間の中を移動していることが明らかであり、また(9b)も同様に観察者"we"が"the end of the year"に向かって時間の流れの中を移動していることがわかる。その後 Lakoff and Johnson(1999)ではさらにその拡張事例として(10)のような事例も *MOVING OBSERVER METAPHOR* の一例としている。

(10) a. Will you be staying a *long* time or *short* time?
　　b. Let's spread the conference *over* the weeks.
　　c. I'll be there *in* a minute.
　　e. He left *at* 10 o'clock.　(Lakoff and Johnson 1999:146)

(10)に関する空間から時間への写像は(11)のようになる。

(11) The Observer is at Location 1, and Location 2 is ahead of the Observer. → Time 2 is in the future relative to Time 1.
The Observer is at Location 1, and Location 2 is behind the Observer → Time 2 is in the past relative to Time 1.
A short distance added to a long distance is a long distance → A short time added to a long time is a long time.
If distance A is longer than Distance B and Distance B is longer than Distance C then Distance A is longer than Distance C. → If duration A is "longer" than Duration B and Duration B is longer than Duration C, then Duration A is "longer" than Duration C
(Lakoff and Johnson 1999:146)

MOVING OBSERVER METAPHOR は認知主体が時間軸上の道を移動する為、そこには空間のメタファーが非常に大きく関与しているといえる。従って空間表現においても時間表現においても使用される、"long"や"over"のような形容詞や前置詞などの事例も *MOVING OBSERVER METAPHOR* の拡張事例であると Lakoff and Johnson(1999)は位置づけているのである。余談ではあるが、*MOVING TIME METAPHOR* と *MOVING*

OBSERVER METAPHOR(形容詞、前置詞といった拡張事例を除く)を比較すると前者のほうが圧倒的に言語事例が多い。実際英語母語話者にヒアリングしたところ時間自体が動くという認識はあるが、人が時間の中を動いているとはあまり認識していないという回答を得た。この事実が言語事例の数にも比例してあらわれているといえる。

3.2. Time as a Resource and as Money

西洋の文化に見られる時間のメタファーとして *TIME IS A RESOURCE METAPHOR* (Lakoff and Johnson1999:161)を本節では考察する。私たちは時間という抽象的な概念を具体物である資源やお金のようにみたてて概念化し言語化している。その代表的なメタファーが *TIME AS A RESOURCE* である。

(12) *TIME AS A RESORCE*

a. You have some time *left*.

b. I've got *plenty* of time to do that.

c. Time *ran out*.

d. I cannot *spare* the time for that. (Lakoff and Johnson 1999:161)

レイコフ達はこの言語事例の元となる RESOURCE SCHEMA が概念スキーマとして存在しており、その概念スキーマの存在により(12)のような言語事例が使用されるとしている。*TIME IS A RESOURCE METAPHOR* の背景にある RESOURCE SCHEMA は以下(13)に見られるような構造を持つ。

(13) *THE RESOURCE SCHEMA*

The elements of the schema:

A Resource

The User of the Resource

A Purpose that requires an amount of the Resource

The Value of the Resource

The Value of the Purpose

The Scenario Constituting the Schema:

Background:

The User wants to achieve a Purpose.

The Purpose requires an amount of the Resource.

The User has, or acquires the use of, the Resource.

Action:

The User uses up an amount of the Resource to achieve the Purpose.

Result:

The portion of the Resource used is no longer available to the User.
The Value of the Schema used has been lost to the User.
The Value of the Purpose achieved has been gained by the User.
(Lakoff and Johnson 1999:161-162)

(13)に示したように *THE TIME IS A RESOURCE METAPOR* にはその背景に THE RESOURCE SCHEMA が存在し、そのスキーマを構成する多くの要素が存在する。そしてそのスキーマを構成するシナリオがあり、そのシナリオの中で私たちは行動し、ある結果を得る。これらの経験から得たスキーマやシナリオが存在し初めて *TIME IS A RESOURCE METAPHOR* が構成され、(12)でみたような言語事例が生まれるのである。

そして *THE TIME IS A RESOURCE METAPHOR* の RESOURCE が MONEY という特殊な事例として現れたものが次の *THE TIME IS MONEY METAPHOR* である。

(14) *THE TIME IS MONEY METAPHOR*

Money	→	Time
The User Of The Money	→	The User Of Time (The Agent)
The Purpose That Requires The Money	→	The Purpose That Requires Time
The Value Of The Money	→	The Value Of The Time
The Value Of The Purpose	→	The Value Of The Purpose

(Lakoff and Johnson 1999:163-164)

MONEY から TIME のドメインへの写像関係は(14)のようになる。この写像関係から次の(15)に見られるような言語事例が生まれる。

(15) *TIME AS MONEY*

a. You're *wasting* my time
b. This budged will *save* you hours
c. That flat tire *cost* me an hour.
d. I've *invested* a lot time in her. (Lakoff and Johnson 1999:164)

"waste""budged""cost"や"invest"などは本来MONEYを表すときに使用される語であるが、MONEY から TIME への写像によって MONEY を形容していた語が、時間を形容する語としても使用されるようになる。これらの時間に関するメタファーはレイコフ達も指摘しているように、ある特定の文化に見られる時間の概念化の際に使用されるメタファーである。もちろん本節で取り上げたもの以外にもこの種のメタファーは多く存在する。しかしこのような特定の文化にのみ見られるメタファーは *MOVING TIME METAPHOR* や *MOVING OBSERVER METAHOR* などとは異なる種類のものであると認識しておく必

要性があるだろう。

3.3. まとめ

Lakoff and Johnson(1999)は「時間は動きあるものであり、方向付けを持つこと」と「空間からの写像」であることを重視した。そしてそれらの特性を反映したメタファーである、*TIME ORIENTATION METAPHOR*、*MOVING TIME METAPHOR* と *MOVING OBSERVER METAPHOR* を非常に重視した。この前提が強すぎたためレイコフ達の時間モデルには次に示したようないくつかの問題点が見られる。

Lakoff and Johnson (1999)の問題点

① 時間の方向付けが成されていないものと時間の方向付けが成されている事例を同等に扱っている。→ (5a) (5c)

② 認知主体自身が動くと思われるような事例が *MOVING TIME METAHOR* の事例として位置づけられている。→ (5c)

③ "follow"や"precede"などの事例は動く時間に後続する時間として *MOVING TIME METAHOR* の一例とされているが、そこでは時間の動的な動きよりむしろ静的な時間関係の順序が問題となっていると考えられる。→ (5d) (5e)

④ "previous"のような空間表現を持たない、時間の順序関係のみを表す語の説明が、空間からのメタファーを重視したレイコフたちのモデルでは説明できない。→ (6)

次節では Lakoff and Johnson(1999)に見られるこれらの問題点を踏まえて、新たな観点から時間認知モデルの構築を試みる。

4. 新たな時間認知モデル

Lakoff and Johnson(1999)は、メタファーなしに時間を概念化し言語化することは不可能であるとし、そして *TIME ORIENTATION METAPHOR* を世界共通のメタファーと位置づけ、*MOVING TIME METAPHOR* や *MOVING OBSERVER METAPHOR* を用いて分析を行った。しかし「動き」と「方向性」を時間の重要な特性と捉えた彼等の分析には前節で指摘したようにいくつかの問題点が見られた。彼等は「動く時間」にとらわれすぎた為、動かない時間、つまり「静的な時間認知」の存在を見逃してしまったのである。本稿ではこれまでの先行研究では考えられることの無かった静的な時間認知の方法を提示し、そしてその時間認知に関わる重要概念、ORDER(順序)を紹介する。二節において分析哲学における、マクダガートとラッセルの論争を概観した。彼らはA系列「過去・現在・未来」とB系列「より前・より後」による二種類の時間の記述を認め、どちらの系列がより本質的であるかという問題を議論の対象としていた。この議論は分析哲学におけるあくまでも認識論レベルでの論争であったが、言語においても ORDER という概念、つまり B 系列は非

常に重要な概念であり、又空間表現から時間表現への拡張過程を考える際には不可欠な媒体概念であると本稿で位置づける[4]。本節では言語事例をもとになぜ ORDER という概念が時間認知において重要であるのかという点を明らかにし、また Lakoff and Johnson(1999)とは異なる視点から新たな時間認知モデルの構築を試みる。

4.1. 時間認知モデルの構図

本稿で提示する時間認知モデルの構図を簡単に概観すると以下の図1のようになる。

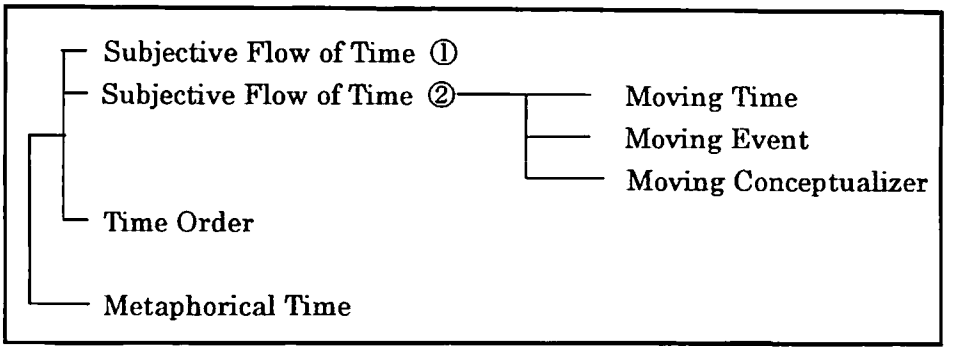


図1

Moving Time・Moving Event と Moving Conceptualizer はそれぞれ Lakoff and Johnson(1999)の *MOVING TIME METAPHOR* と、*MOVING OBSERVER METAPHOR* とほぼ同様のものあるが本稿では Moving Time とは別に Moving Event を設け両者を分類する。本稿で提唱する時間認知モデルが Lakoff and Johnson(1999)と大きく異なる点は Time Order を時間認知の大きな要因として Subjective Flow of Time[5]とは別に位置づけている点である。Subjective Flow of Time は認知主体を取り入れた主観的且つ動的な時間であるのに対し、Time Order は、認知主体は時間の流れには関与せず、かつ静的な時間である。この Time Order の大きな特徴は、時間の流れが捨象されており、イベントの順序が問題となっているという点である。つまりここでは動的な時間認知ではなく、静的な時間認知がなされているのである。そしてこの静的な時間認知である Time Order という概念を設けることによってこれまでのレイコフ達のモデルに見られた問題点の多くは解決されると考えられる。次に Metaphorical Time であるが、ここにはレイコフ達の挙げた *TIME AS RESORSE* や *TIME AS MONEY* などのメタファーが属する。このメタファーは比較的普遍性が高い Moving Time、Moving Conceptualizer や Time Order に比べ文化性が高い。そのためこれらのメタファーを Metaphorical Time と本稿では位置づけ、そのほかの時間認知方法とは明確に分類している。本稿において主に分析を行うのは Subject flow

[4] "previous"のような時間の順序関係のみを表し空間表現を持たない事例の存在は空間のメタファーを用いて説明することは不可能である。
[5] これまでのレイコフ達の時間のメタファー(*MOVING TIME METAPHOR, MOVING OBSERVER METAPHOR*)と概念的にも類似したもの。

of time と Time Order である[6]。これら二種類の時間認知方法は本稿で提示する時間モデルにおいて中心的な役割を担う時間認知方法であると考えている[7]。

4.2. Subjective Flow of Time ①

Subjective flow of Time とは時間の流れの中に認知主体自身が入り、その流れを認知主体自身が認知している時間認知である。ここでは認知主体は、時間が流れているということを意識しているが、時間の前後の方向付けなどは一切行っていない。ここで問題となるのは認知主体が自身の内部において時間をどのように認知しているのかという点である。Subjective Flow of Time の"Subjective"、つまり「主観性」という語は、認知主体自身の内部における時間認知という意味で用いられている。私達はある一定の期間の長さを様々な状況下において長く感じたり、短く感じたりする。それは認知主体の主観性が深く時間認知に入り込んでいるためである。例えば以下に示すような言語事例は主観性を大きく反映しているといえる。

(16) a. Time dragged by.
b. Time flew by.

(16a)は認知主体自身が時間が非常にゆっくり流れていると認識した場合に発話され、(16b)は時間の流れが非常に速いと認識されたときに発話される。このように認知主体の意識の状態によってある一定量の時間の長さが非常に長くなったり、短くなったり変化する[8]。このような時間認識が(16)のような言語事例として現れているといえる。本稿ではこのような時間認知を Subjectivive Flow of Time①と位置づける。

4.3. Subjective Flow of Time ②

前節で考察した Subjective Flow of Time①は認知主体自身の内部での時間認知という意味で「主観性」という語を用いていたが、本節における Subjective つまり「主観性」とは、認知主体が時間の流れの中に入るという意味を表している。ここでは Subjective Flow of Time①で見たように認知主体自身の内部での主観性は問題とならず、認知主体が時間の流れの中に身を投じているという意味で主観的なのである。認知主体が時間の流れの中に身を投じた場合、そこには二種類の時間認知方法が存在すると考えられる。認知主体が自分自身時間の中を移動しているかのように認知する場合と、認知主体自身は静止しているがその背景となるイベント(時間)が移動しているかのように認知する場合の二種類である。それが次節で見る Moving Time、Moving Event と Moving Conceptualizer である。

---

[6] Metaphorical Time に関しては本稿ではその存在を示唆するに留める。

[8] 主観的にある一定量の時間が変化するというのは物理学や分析哲学などにおいて考えられてきた客観的な時間の記述を目指す時間論とは大きく異なる点である。

4.3.1. Moving Time

Moving Time はTIME の持つ特性である MOTION を反映した事例である。認知主体は静止しており、動いてゆく時間自体の流れを知覚している。Moving Time の特徴は、認知主体は時間の前後の方向付けを行っておらず、ただ時間が流れているという状態のみを知覚しているという点である。つまりここには *TIME ORIENTATION METAPHOR* は存在していないといえる。

(17) a. Time *flies*.　(Lakoff and Johnson 1980:45)
　　b. The time has passed.

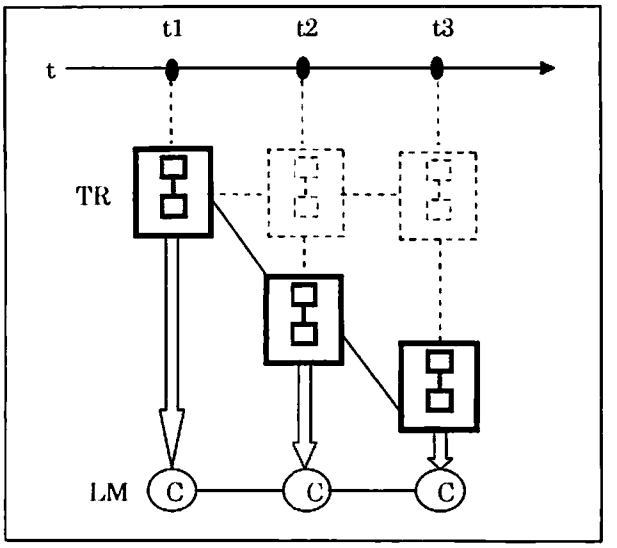
静止している認知主体に対し、特に前後の方向付けを持たない流れる時間の存在が(17)の事例からわかる。

4.3.2. Moving Event

Moving Event とは時系列に起こった EVENT や THING が動きを伴い移動しており、動く対象が時間ではなく EVENT である点において Moving Time とは異なる。このとき認知主体は静止しており、動いている EVENT を傍観している観察者となる。認知主体が動いていると知覚しているのはTIME の動きではなく、EVENT やTHING の動きである。このように認知主体自身が時間軸上に静止しており、時間軸上の EVENT が動いているかのように時間を認知したものが Moving Event である。本稿で位置づける Moving Event の事例は(18)のような事例である。

(18) a. I look *forward* to the arrival of Christmas.
　　b. The deadline is *approaching*.
　　c. Let's meet the future *head-on*.　(Lakoff and Johnson 1980:42)

(18a)では"Christmas"が、(18b)では"deadline"という EVENT が移動している。Moving Event を図を用いて表すと次の図2のようになる。ここでは EVENT と認知主体の二者間の関係が問題となる。そのため本稿では移動を伴い、また際立ち度の高い EVENT を TR とし、言語としては明示化されていない認知主体を LM とする。そして EVENT と認知主体の関係と、その背景にある動く時間、この三者の関係すべてを反映したものが図2にあたる。



MOVING EVENT 図2

「t1→t2→t3」と時間が経つにつれてTRであるEVENTはLMであるConceptualizerに移動を伴って向かってくる。私たちは時間と認知主体とEVENTの関係を図2に示したように捉えており、その認知の表れが(18)に示したような言語事例としてあらわれているといえる。

(19) a. Let's meet the future *head-on*.
b. In the weeks *following* next Tuesday, there will be very little to do.
c. On the *preceding* day, I took a long walk.
d. Next week and the week *following* it.

Lakoff and Johnson(1999)では *MOVING TIME METAPHOR* としていた(19)の事例は本稿ではMoving Time、Moving Eventこのどちらの事例としても扱わない。これらは、本稿において提唱する「順序」と言う概念を媒介としたTime Orderの事例であると位置づける。ここにレイコフらの時間モデルとの大きな違いがある。そしてこのTime Orderという時間認知の方法を取り入れることによって、前節において問題であると指摘した、動きを伴わない時間表現や空間表現を持たず、時間の順序関係の意味のみを持つ"previous"、又純粋に順序の意味しか持たない"next"などの事例の説明が可能となると考えている。

4.3.3. Moving Conceptualizer

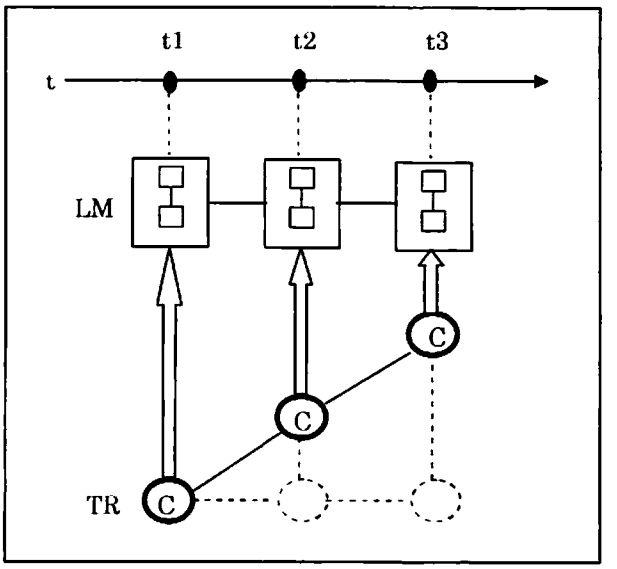
認知主体自身が時間軸上を移動しており、動かない静的なEVENTを時系列順に認知してゆく。認知主体は時間は静止していると認知し、自身が時間軸上を移動しているかのよ

うに時間との関係を捉えている。このような時間認知が Moving Conceptualizer である。Moving Conceptualizer には、認知主体自身が物理的な移動を伴っている場合と、認知主体は静止しており、ただメンタルパスのみを走らせている場合と二種類ある。つまり認知主体が実際動きを伴って移動しているように感じられる動的な言語事例と、実際の認知主体の移動はなく、主体のメンタルパスのみがイベントに向かって向けられている、メンタルパスの移動が見られる静的なものの二種類があるということである。動的なものが(20)にあたり、静的なものが(21)にあたる。本稿では前者がプロトタイプ事例であり、その拡張事例が後者であるとする。

(20) a. As we *go through* the year, ...
b. As we *go further* into the 1980s, ...
c. We're *approaching* the end of the year. (Lakoff and Jonson 1980:43)

(21) a. Let's meet the future *head on*.
b. We're looking *ahead* to the *coming* Sunday.
c. I can't *face* the future. (Lakoff and Johnson 1999:143)

(20a)では"we"として表記されている認知主体自身が、物理的な移動を伴って時間軸上を移動していることが、動詞"go through"との共起からもよくわかる。また同様に(20c)においても"we"が"the end of year"に向かって"approach"していることが明白である。一方(21a)の場合、(20)とは異なり、認知主体である"I"が"future"に向かって時間軸上を移動しているわけではないが、認知主体が"future"に向かってメンタルパスを走らせ、そこへ向かおうとしていることが動詞"meet"との共起からも推察できる。同様に(21b)においても認知主体である"we"が"coming Sunday"に向かってメンタルパスを走らせていることが動詞"look ahead"との共起からも明らかである。(21)に挙げた事例は Lakoff and Johnson (1999)では *MOVING TIME METAPHOR* の事例とされていたが、本稿ではこれを物理的な移動を伴わない、メンタルパスの移動を伴った Moving Conceptualizer の拡張事例であると位置づける。Moving Conceptualizer を図式化すると次の図3のようになる。ここでも前節の図2と同様に、時間と認知主体の二者間の関係が問題となる為、TR と LM を用いて図式化している。Moving Conceptualizer の場合、認知主体自身が移動を伴っていると認知される為、より際立ちが高く TR としてプロファイルを受ける対象となり、一方 EVENT は認知主体が向かってく対象として静止しており、プロファイルはされておらず LM として機能しているといえる。



MOVING CONCEPTUALIZER 図 3

図 2 とは異なり「t1→t2→t3」と時間が経つにつれ認知主体自身が動きを伴って EVENT へと向かっていく。これが本稿で Moving Conceptualizer と位置づけるものである。

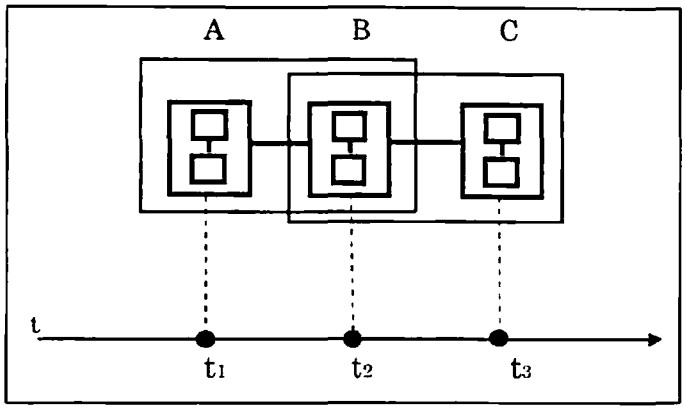
以上動的な時間認知の反映である 3 つの時間認知の方法を考察した。次節では本稿において新たに提唱する静的な時間認知、Time Order を考察する。

4.4. Time Order

Lakoff and Johnson(1999)では TIME IS MOTION を重視し、この前提に基づき事例分析を行っていた。しかし本稿ではレイコフ等の提示した動的な時間認知方法の外に、「順序」という概念をもとにした Time Order という静的な時間認知の方法があることを提示する。この Time Order においてはレイコフらの指摘した時間の動きは背景化されており、問題となるのはイベント同士の相対的な順序関係である。その意味において非常に静的な時間認知であるといえる。イベントの順序関係のみが問題となる Time Order の言語事例を被験者に提示した結果、そこには時間の流れは感じられないという回答が大多数を占めた。レイコフらの主張に従うなら、認知主体はあらゆる場合において、時間は流れていると認知し、時間の流れに方向性を持たせているということになる。しかし事実は彼らの主張とは異なっているようだ。時間認知とは動きや方向性を前提としたメタファーのみを中心として構成されているのではなく、本節で提唱する静的な時間認知と、前節で見た時間や認知主体の動きが問題となる動的な時間認知の二種類が存在し、その認知方法の違いが様々な言語表現として現れていることを本稿で明らかにし、Lakoff and Johnson(1999)とは異なる視点から時間認知を再考する。

Time Order を図式化すると図4のようになる。これまでの時間認知と大きく異なる点は、行列のように並んだイベントの位置関係、つまり順序関係のみがプロファイルされ、時間の流れは背景化されているという点である。

(22) a. *Next* week and the week *following* it.　(Lakoff and Johnson 1980:43)
b. On the *preceding* day, I took a long walk.　(Lakoff and Johnson 1999:143)



TIME ORDER　図4

(22a)の場合、"the week following it"の定冠詞"the"を省略する事は出来ない。省略すると文法的に不適格な文となる。定冠詞が存在するということは、そこに基準となるある基準点が存在し、その基準点のあとに続くのが"following"が意味するところとなる。(22a)を図4を用いて説明すると、まず"next"が「～の次」を意味することから、最初の基準点はAとなり、"next week"は「Aの次の週」であるからBの位置に位置づけられる。そして"the week following it"はBの後に続く週なのであるからCとなる。このように(21a)の事例を認識する際、私たちはそこに流れる時間や認知主体の存在などを想起しておらず、静的に並んだイベントの順序関係のみにメンタルパスを走らせている。Lakoff and Johnson (1999)では(21)に見られるような"following"や"preceding"などの言語事例も *MOVING TIME METAPHOR* の一例であるとし、動的な時間認知の反映であるとしていたが、実際時間の動きは背景化されており、動きは問題となっていない。つまり静的な時間認知を行っているのである。レイコフ達が問題としなかった純粋に順序の概念のみを表す"next"や、さらには"previous"のように時間表現の順序の用法しか持たない語を本稿では Time Order の事例であると位置づける。それではなぜ本稿において ORDER という概念を重要視するのか、その点を次節において考察する。

4.5. "Time Order"の重要性

前節に示した時間認知モデルの構図からも明らかなように、本稿ではORDERを時間認知の際に欠かせない、空間表現から時間表現への意味拡張の際、媒体概念となる非常に重要な概念であると位置づける。なぜORDERという概念を重視するのか。本節ではORDERという概念の詳細を明らかにする。

4.5.1. 意味拡張の媒体概念としてのORDER

本稿におけるORDERとは、メンタルスキャニングの際、連続して起こると捉えられる2つもしくはそれ以上のモノ・イベントの関係であり、相対名詞を考える上で空間から時間への転用を促す中間段階となる重要概念となるものである。図式化すると図5のようになる。

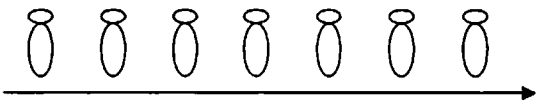


図5

Orderにはその下位レベルとしてSpatial Order(空間的順序)とTemporal Order(時間的順序)が存在する。次節ではSpatial OrderとTemporal Orderについて考察する。

4.5.2. Spatial OrderとTemporal Order

Spatial OrderとTemporal Order、両者の違いは同じイベントを異なる側面、つまり空間の側面と時間の側面から切り取った認知の違いによる言語の違いである。例えば日本語の「アトからついて来る」という、空間表現とも又時間表現ともとれるあいまいな事例が、なぜそのようなあいまい性を持つのかをORDERという概念を用いて明らかにしたものが(23)(24)である。「アトからついて来る」が空間表現として認知される場合、私たちは(23)のように空間における順序性をプロファイルして認知しており、一方時間表現としてそのイベントを認知した場合、私たちは(24)のように時間軸上における順序性をプロファイルしていると考えられる。従って「アトからついて来る」に見られるあいまい性は同じイベントを異なる側面から、つまりSpatial OrderとTemporal Orderから切り取ったプロファイルの違いによるものなのである。このようなSpatial OrderとTemporal Orderの同一イベント内における共起現象が「アト」という語の空間から時間への意味拡張の大きなトリガーになったと考えられる。

(23) Spatial Order

アト(ウシロ)からついて来る

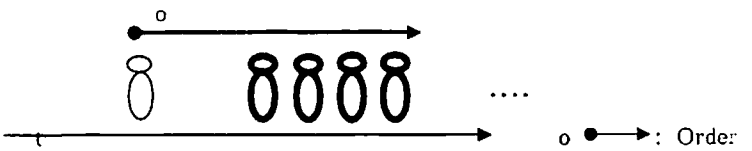


図6

(23)のように空間的な順序にプロファイルを当ててこのイベントを言語化した場合、「アトからついて来る」は「ウシロからついて来る」とほぼ同義となる。この時、認知主体は話者の後ろに行列のように続いている空間的な順序関係をプロファイルしており、その結果「アトからついて来る」という言語表現が生まれる。

(24) Temporal Order

アト(*ウシロ)からついて来る

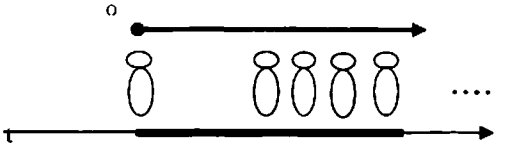


図 7

一方(24)のように(23)と言語表記としては全く同じである「アトからついて来る」であっても、この場合空間的な順序関係ではなく、時間的な順序関係を問題としている。そのため空間を表す「ウシロ」は、「アトからついて来る」(時間的順序)の同義表現として使用することはできない。以上の考察から「アト」は以下のような拡張過程を経たと考えられる。

図 8

このように特に相対名詞においては空間的な順序と時間的な順序が同一言語表記において共起することが多く見られる。これはあるひとつのイベント内において Spatial Order と Temporal Order が共起することが多いために生まれる言語事例であるといえる。以上のことからも順序という概念が空間から時間への意味拡張の一つのトリガーとなったと考えられる。

以上簡単ではあるが Spatial Order と Temporal Order という概念を紹介した。次節では ORDER の意味のみを持つ言語事例を分析し、新たな視点から ORDER という概念の重要性を考察する。

4.5.3. ORDER の意味のみを持つ語の存在

前節ではORDERという概念が空間から時間への意味拡張のトリガーとなっている事実を考察したが、本節では空間表現を持たず Temporal Order の意味のみを持つ英語の "previous"や、日本語「のち」などの事例や ORDER の意味しか持たないその他の語が如何に意味拡張を成したのかという問題を明らかにする。

時間表現として非常に使用頻度の高いものの中には、空間的な順序関係、もしくは時間

的な順序関係の意味しか持たないものが多く存在する[9]。(25)"follow"の言語事例を英語話者のヒアリング結果を基に並べたものが(25a)～(25g)である。"follow"は「～の後に続く」という意味を持つ為、必ずある対象物とそれに続くものという二者間の順序関係が問題となる。本来は空間的な順序関係のみを表していた"follow"であったが(25d)のように、空間的な順序と時間的な順序の共起現象が起こり、それがトリガーとなって、空間用法だけでなく時間的な順序関係を表す用法を獲得し、形容詞化していったと考えられる。

(25) FOLLOW (Spatial & Temporal Order)

a. He *followed* her into the house. (SPATIAL ORDER)

b. *Follow* me please. I'll show you the way.

c. I think we are being followed.

d. She *followed* her mother into the medical profession. (SPATIAL/TEMPORAL ORDER)

e. The first two classes are followed by a break.

f. They arrived on Monday evening and we got there the *following* day.

g. The *following* is a brief summary of events. (TEMPORAL ORDER)

空間から時間への意味拡張の過程が英語以上に顕著に現れているのが日本語の「アト継ぎ」の事例である。(26)に示した日本語「アト継ぎ」は、今現在(26a)の「跡継ぎ」と(26b)の「後継ぎ」に見られるように二種類の漢字が使い分けられている。ではどのような基準に基づいてこれらの漢字が使い分けられているのか。(26a)の「跡継ぎ」は空間的な跡を継ぐ場合に使用され、(26b)の「後継ぎ」は時間的な後を継ぐ場合に主に使用される。今現在は(26b)「後継ぎ」が頻繁に使用される傾向にあり、まさに今現在意味変化の過程にある事例である。そして漢字の使い分けが成されていることから顕著に空間的順序から時間的順序への意味拡張の過程が見てとれる非常に興味深い事例である。

(26) a. 跡継ぎ (Spatial Order)

b. 後継ぎ (Temporal Order)

次に"next"であるが、この語は純粋に順序のみを表す語である。もともとは"near"の最上級であり、「もっとも近いもの」という意味から転じて「～の次」という意味変化を成した語である。"next"は「方向性」という面においてもニュートラルな語である。例えばある写真に三人の男性が写っており、それぞれ順にAさん、Bさん、Cさんと並んでいる。"next to Mr.B"といった場合、AさんとCさん両方を共に指すことが可能である。つまり"next"自体には方向性は無いのである。しかし行列のようにそれ自体が前後の方向性を持つものなどと共に使用されると"next"はある一定の方向性を持つようになる。同様のことが時間表

[9] "follow""precede"の他にも"before""after""former""latter"なども順序の意味のみを持つ語である。

現として使用された場合にも当てはまる。時間のように一方向性を持つものと共に使用されると"next"は時間軸に沿った方向性を持つようになる。"next"も"follow"と同様に空間的な順序と時間的な順序の共起現象がトリガーとなって空間から時間へと意味拡張を成したと考えられる。(27)がその事例にあたる。

(27)　Next (Spatial & Temporal Order)

a. Turn left at the next traffic lights.　(SPATIAL ORDER)

b. The man next to me is my father.

c. Who'snext?　(SPATIAL/TEMPORAL ORDER)

d. The next six months will be the hardest.

e. I'll go to London the week after next.　(TEMPORAL ORDER)

最後に時間的な順序関係の意味しか持たない"previous"を考察する。Lakoff and Johnson(1999)の分析に従うと、時間のメタファーは空間からの写像によって構成されているということになる。しかしこれまでの事例とは異なり、"previous"の場合その語自体は空間的な意味は持っておらず、時間的な順序の意味しか持ち合わせていない。空間のドメインを基とした空間からのメタファーでないとしたらこの語は一体どこから生まれてきた語なのだろうか。今現在"previous"は(28)のように使用されている。

(28) PREVIOUS (Temporal Order)

a. The car has only had one previous owner.　(TEMPORAL ORDER)

b. I'd only seen him the previous day.

"previous"は形容詞として「以前の～」もしくは「前の～」という意味を持つ語である。これまで見てきた"follow"や"next"などは順序の意味のみを持つ語ではあったが、空間的順序として空間の用法を持っており、時間的な用法はその空間的順序と時間的順序の共起現象により意味拡張を成したと分析を行ってきた。しかし空間用法を持たない"previous"の場合、これまでの事例と同様に空間からの拡張事例であると位置づける事はできない。本稿では"previous"のような時間表現しか持たない事例は空間からの拡張事例ではなく、ORDERという概念から派生した言語事例であると位置づける。その拡張過程は図9に示したとおりである。

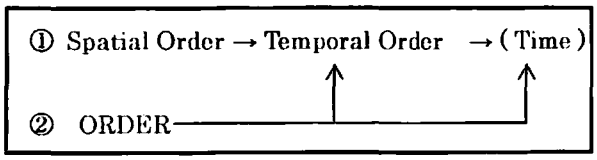


図9

図９の①に見られる拡張過程、「Spatial Order → Temporal Order → Time」は"follow"や"precede"などに見られる空間的順序と時間的順序の用法を併せ持つ語の拡張過程であり、②の「ORDER → Temporal Order → Time」は"previous"のように空間的な用法を持たず時間的な順序関係のみを表す語の意味拡張過程を表したものである。"previous"以外にも日本語にも同様の拡張過程を経たと考えられる語が存在する。

(29) a. のちに分かりますよ
b. 雨のち晴れ

(29)に見られる「のち」という語も"previous"と同様に日本語において時間的な順序関係のみを表す語であり、空間的な用法は持ち合わせていない。従って②に示したようにORDERという概念から時間のドメインへと意味拡張を経た語の一例であると言える。時間認知表現として使用頻度の非常に高い"follow" "precede"や"next"はORDERの意味しかも持っておらず、また"previous"や「のち」に関してはTemporal Orderの意味しか持たない。このような事例からも明らかなように時間認知の方法として、ORDERという概念は重要視されるべきであり、そのORDERという概念をもとにした時間認知の用法であるTime Orderを新たに設ける必要性を本稿においてあらためて主張する。

以上の考察からも、ORDERが空間から時間への拡張のトリガーとなっている事例が多く存在していることが明らかとなった[10]。特に"previous"や日本語「のち」などは空間の用法を持たず、時間表現として時間的な順序という概念しか表し得ない。このような事例は空間からの拡張ではなく、ORDERという概念から拡張したと考えるのが妥当であろう。ORDERという概念は時間認知を考える上で非常に重要な概念であり、本稿において考察対象とした言語事例から言えることは、「順序」は認知主体が時間認知の際に使用する重要概念のひとつであるということである。

4.5.4. その他の事例

その他にもORDERという概念が重要であると考えられる事実を簡単ではあるが本節において幾つか紹介しておきたい。英語"Late"の比較級に非常に興味深い差異が見られる。それが(30)である。

(30) a. Late－Later－Latest (時間の比較級)
b. Late－Latter－Last (順序の比較級)

---

10 本稿では相対名詞に見られる空間から時間への拡張に関して詳細に述べていないが、碓井(2001)(2002)において空間的順序と時間的順序の同一イベント内での共起現象が空間から時間への拡張のトリガーとなっていることが指摘されている。

"Late"は「遅い」という意味を表す形容詞であるが、時間的な遅さを表す場合(30a)のように「Late－Later－Latest」となり、順序的な遅さを表す場合は(30b)のように「Late－Latter－Last」と変化する。時間的な遅さか順序的な遅さかで言語表記を使い分けているのである。またそのほかにも順序という概念を重視した事例として、順序を表すための「序数」の存在があげられる。多くの言語において「数字」とは別に順序を表す数の表記法である「序数」が存在する。このことは「順序」という概念が私達人間にとって非常に重要視されている概念であるということを裏付けている。

以上本稿で位置づけるORDERという概念とは如何なるものなのかを考察し、ORDERという概念のもつ重要性を様々な観点から紹介してきた。時間認知を可能としてるのはレイコフ達が指摘している空間からのメタファーだけでなく、今回紹介したORDERという概念も非常に重要な役割を果たしているといえる。またレイコフ達は時間を動き或るものとして捉らえたが、本稿で提案したORDERを用いた時間認知であるTIME ORDERの場合、時間の流れは背景化されており、非常に静的である。以上の考察から、動的な時間認知を反映したMoving Time・Moving EventやMoving Conceptualizerと、本稿で提案した静的な時間認知を反映したTime Orderの二種類が時間認知の際に中心となる認知方法であると考えられる。

5. 結語

本稿では認知言語学の観点から新たな時間認知モデルを提示し、ORDERという非常に重要な概念が時間認知の際に不可欠な概念であることを明らかにした。ORDERとは空間表現から時間表現への意味拡張のトリガーとなる概念であり、また単なるトリガーとしてではなく時間表現を考察する上で非常に重要な概念的役割を果たしていることが明らかとなった。これまではLakoff and Johnson(1999)に代表されるように*TIME IS A MOVING OBJECT METAPHOR*や、*TIME ORIENTATION METAPHOR*などのメタファーを介してのみの時間認知、また時間認知表現の分析がなされていたが、時間の特性である動きと、時間とは空間からの写像であるということを反映したこれらのメタファーにとらわれすぎて事実に基づいた言語事例の分析がなされてこなかった。本稿ではLakoff and Johnson(1999)のモデルに新たにTime Orderという時間認知方法を設けることによって、レイコフらの分析では不十分であった事例も詳細に分析することが可能となり、又時間認知の方法は一通りではなく、少なくとも本稿で提示した動的な時間認知、Moving Time・Moving EventとMoving Conceptualizer、そして静的な時間認知であるTime Orderこれらの二種類の方法を用いて私たちは時間認知を行っている事が明らかとなった。特に"previous"や日本語の「のち」のように空間的用法を持たない語は、本稿で紹介したORDERの概念を基に時間表現へと拡張したことが明らかとなり、時間表現において、空間をドメインとした写像以外の過程も存在することが分かった。本稿で分析対象とした言

語事例とさらにこれまでの研究により明らかとなったその他の語の拡張過程を図式化したものが図 10 にあたる。

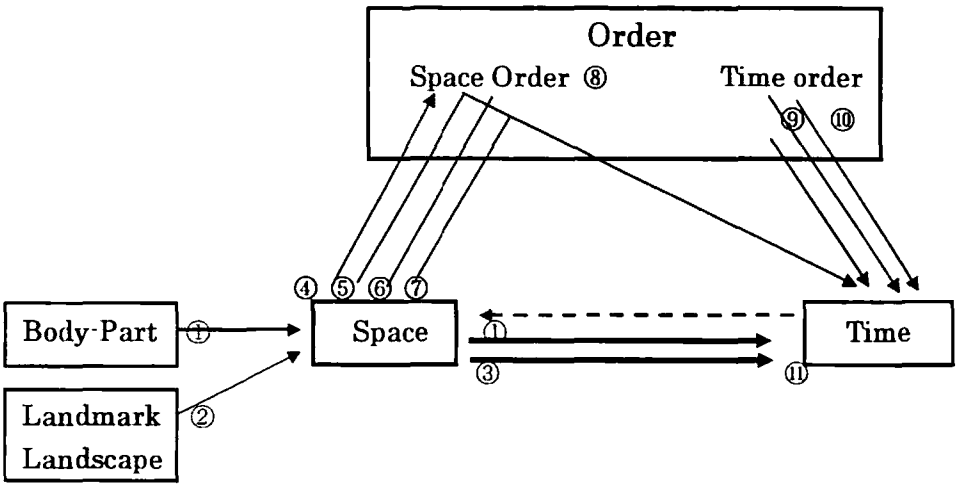


図 10

以下の図 11 は図 10 の拡張過程をまとめたものである。

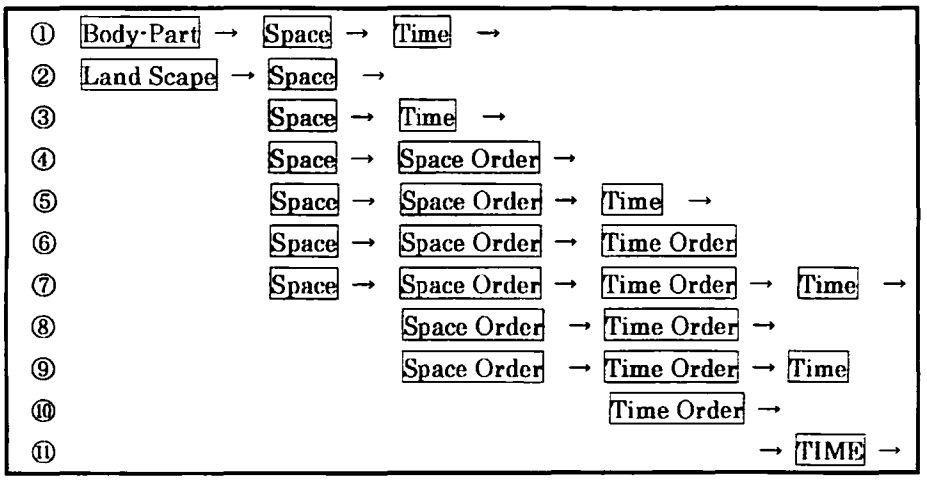


図 11

図 11 に示した空間表現から時間表現へ拡張を成した語をまとめたものが次の図 12 にあたる。ここでは本稿において考察対象としなかった事例も、これまでの分析結果を基にまとめている[11]。

11 図中の線の引いてある箇所はそこに当てはまる事例が存在しないということを意味するのではなく、今後分析対象を広げ言語分析をしていく過程において適切な言語事例が当てはまる可能性を有していることを意味する。

FROM SPACE TO TIME	
① BACK／FRONT	⑦ FOLLOW／PRECEDE
② ――――	⑧ ――――
③ ――――	⑨ FORMER／LATTER
④ ――――	⑩ PREVIOUS
⑤ BEHIND／AHEAD	⑪ WHILE・DURING・SINCE
⑥ BEFORE／AFTER	

図.12

今後はより精密で詳細な時間モデル構築のために様々な言語を分析対象とし、認知類型論的立場から今回考察した Subject Flow of Time や Time Order はどの程度普遍的なものなのか、また分析哲学においてマクダガートやラッセル等が問題としていた A 系列「過去・現在・未来」と B 系列「より前・より後」そのどちらが時間にとってより本質的な特性であるのかなどの問題も明らかにしていきたい。

参考文献

Comrie, Bernard. (1976). *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, Bernard. (1985). *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Heine, Bernd. (1991). *Grammaticalization*. Chicago: Chicago University Press.

Heine, Bernd. (1997). *Cognitive Foundations of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

木村敏（1982）.『時間と自己』，東京：中央公論社.

国広哲弥（1986）「語義研究の問題点－多義語を中心として」,『日本語学』, vol.5. pp4-12

国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』，東京：大修館書店.

Lakoff, George (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George. (1993). "The Comtemporary Theory of Metaphor." In Andrew Ortony(ed.) *Metaphor and Thought* (2nd edition), pp.202-252, New York: Cambridge University Press.

Lakoff,George and Mark Johnson (1999). *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.

Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1. Stanford: Stanford University Press.

田中茂徳・松本曜 (1997). 『空間と移動の表現』, 東京：研究者出版.

籾山洋介 (1995). 「多義語のプロトタイプ的意味の認定の方法と実際—意味転用の一方向性：空間から時間へ」, 『東京大学言語学論集』, Vol.14, pp.621－639.

中島義道 (2002). 『時間論』, 東京：筑摩書房.

中山康夫 (1992). 「時間は流れるのか」, 伊藤邦武(編), 『新・哲学講義５コスモロジーの闘争』, pp.297-317, 東京：岩波書店. 東京.

Soteria, Svorou. (1993). *The Grammar of Space*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

滝浦静雄 (1976). 『時間』, 東京：岩波書店.

碓井智子 (2001). 「空間認知表現と時間認知表現－日本語マエとサキの認知言語学的考察」, 京都大学, 人間・環境学研究科 修士論文.

碓井智子 (2001). 「空間認知表現と時間認知表現－サキの認知言語学的考察」, 『日本認知言語学会論文集』, Vol.2. pp.150-159.

碓井智子 (2002). 「空間から時間へ」－『あと』(跡と後)の認知的観点からの考察」, 『日本認知言語学会論文集』, Vol.3. pp.63-73

William Croft. (1990). *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.

山梨正明 (1995). 『認知文法論』, 東京：ひつじ書房.

山梨正明 (2000). 『認知言語学原理』, 東京：くろしお出版.